第4回生涯学習審議会
資料2

答申「今後の町田市民文学館のあり方について」に係る取組状況について

１．町田市民文学館について

町田市民文学館は、作家遠藤周作氏の蔵書・遺品が寄贈をきっかけに２００６年１０月に開館しました。町田市ゆかりの文学者の資料をはじめとした町田の文化遺産を収集し、保存・公開を行うことを大きな目的としており、市民が文学を通じて交流し、その成果を発表しあえる「市民の文学活動」の拠点となることを目指しています。

町田市教育委員会では、所管する公共施設についてのあり方の検討を行うとともに、施設の管理運営や実施事業をより効率的に行うための見直しに向け、２０１８年７月、町田市生涯学習審議会に対して「今後の町田市民文学館のあり方について」を諮問し、同年１０月に答申をいただきました。

この答申を踏まえ、２０１９年２月に「町田市民文学館のあり方見直し方針」を策定し、これまで様々な見直しを進めてきましたので、現在の取組状況等について報告いたします。

２．答申内容と現在の取組状況について

（1）事業の見直しについて

＜子ども向け事業の充実＞

～答申概要～

子どもたちが文学やことばと触れ合う機会を増やすため、子どもの学びへの意欲を引き出すような、創作活動などの主体的な学びを取り入れた事業を展開することで、継続的な利用につなげていくべき。また、教員や学校支援ボランティアコーディネーターに事業内容の理解を深めてもらえるよう積極的に情報提供を行いながら、学校関係者との関係づくりを進めるべき。

現在の状況	・2019 年春に大日本タイポ組合展「文ッ字」を開催して以降、10 代、20 代を対象にした展覧会を年 1 回開催し成果を上げている。「57577 展」「浅野いにお展」では観覧者の内 20 代が最も大きな割合を占め、若い世代に文学館に関心を持って貰えるようになった。 ・2021 年度から、子どもたちが“ことば”を使った創作の楽しさに触れる機会として「ことばらんどショートショートコンクール」を実施。「書き方講座」の出張授業を同時に行い、学校関係者との関係づくりも進めてきた。初年度は市内在住・在学の小・中・高校生から 939 作品の応募が、前回 2024 年度は 1,149 作品の応募があった。 ・0 歳児から未就学児までを対象とした、ことばに親しむことを目的に実施していた各種事業は、コロナ禍の影響を最も強く受け 1 年半に亘り開催ができなかった。また再開後は定員を減らす、距離を保つなどの制約を少しずつ緩和して事業を行ってきたが、いずれもコロナ前の状況には回復していない。

今後の予定・課題	・今後も、10 代・20 代を対象にした展覧会を年 1 回実施する。 ・「ことばらんどショートショートコンクール」及び出張事業を引き続き実施するとともに事業の PR に努めていく。 ・0 歳児から未就学児を対象にした事業は、ようやく保護者と一緒に安心して参加できる状況になってきた。新たな世代の保護者ニーズを汲み入れながら、参加者の増加を目指していく。

＜「文学」の概念の拡大＞

～答申概要～

町田市ゆかりの文学者や文学作品を取り上げ、展覧会を通して市民に伝えていくことは、文学館の大切な役割であるため今後も展開していくことが求められる。一方で、幅広い世代に文学館を利用してもらうきっかけとして、これまで以上に親しみやすいテーマや手法を取り入れた事業を新たに展開していく必要がある。

現在の状況	・遠藤周作生誕 100 年記念展や森村誠一没後 1 周年記念展などゆかりの作家を顕彰する展覧会を実施する一方で、漫画や音楽、落語やデザインなど“ことば”や文字、文学を柱としながらジャンルに拘らない魅力的な展覧会を開催してきた。 ・文学者の回顧展であっても、作家を編年的に紹介する知識享受型から、作品テーマや紡がれた文章の魅力に触れることで思考や対話のきっかけとなる気付きの場へと展示内容が変化している。また東京オリンピックや新型コロナの記憶など時流に合わせたテーマの展覧会も開催している。こうしたアプローチの変化から、観覧者の年代が 60 代以上の高齢者から 40 代・50 代、時には 20 代を中心としたものへと変化してきた。と同時に観覧者数も増加し、2024 年度合計では 32,548 人と、開館以来最高の年間観覧者数となった。 ・こうした変化は教育普及事業等でも見られ、市の内外の文化施設から当館で過去に実施した展覧会の開催や講座・講演会の講師を依頼されるようになり、結果として町田ゆかりの文学者や文学館の活動についてより多くの方々に知ってもらう機会となっている。
今後の予定・課題	・「文学」の概念の拡大やアプローチ方法の変化から、従来、文学館に興味関心がなかった方、足を運ぶことのなかった方が文学館に目を向け、館を訪れるようになってきた。今後も新たなジャンルや題材を取り上げる等、積極的な事業展開に向けチャレンジしていく。

＜市民の発信力を活かした情報発信＞

～答申概要～

行政が行う情報発信には限界があるため、若年層を中心に自信の活動や作品を広く発表したいと考える市民を巻き込んだ事業を行い、市民に情報発信をしてもらうことで、市民目線の欠如と情報発信不足の解消につなげていく必要がある。

現在の状況	・「文学館まつり」「文ッ字フリマ」を近隣の町内会・商店会と一緒に開催することで協力関係を深めてきた。 ・一方で、展覧会や教育普及事業等の実施により、アーティストや市民との繋がりは確実に広がっている。また、SNS と展覧会・教育普及事業の連動を積極的に進めた結果、2019 年 4 月に 501 人だった X のフォロワーは、現在 3,404 人まで増加している。更に 2020 年には Youtube による動画配信をスタート、2021 年からは Instagram による情報発信も開始し、着実にフォロワーの数を増やしている。
今後の予定・課題	・協力関係にある近隣の町内会・商店会が、コロナ禍以降の経済停滞や高齢化等の影響で、活動の勢いが低下している。 ・市民や関係者・アーティストに積極的に魅力を発信して貰うため、文学館のファンになって貰うとともに、細やかな情報発信を継続的に実施していくことが欠かせない。そのためにも、発信する情報のビジュアルや発信手段、フォロワー獲得のための連携企画などを引き続き模索していく。

＜市民の自己実現を支える事業の展開＞

～答申概要～

文化活動を通じた市民の自己実現を支援するため、一人ひとりの学習ニーズや学習の段階に寄り添い、ステップアップにつながる支援を行うとともに、市民の文化活動の成果発表への支援や、多世代のアーティストや作家が交流できる機会づくりなど、市民同士を繋いでいく役割を担っていくことが必要である。

現在の状況	・開館時から実施してきた「おとなのためのおはなし会」「紙芝居・大人の時間」に加え、「時代小説読み語り」「宮川哲夫記念コンサート」「森村誠一作品の朗読会」「立川談声落語会」など、市民との共催・協力事業の数を増やしてきた。また、来館者が自己表現や創作体験をする場、互いに交流する場として、展覧会と連動した短歌募集やコンテスト、フェス、マルシェなどを、また近隣の町内会、商店会との協働事業としてイベントなどを実施し、若い世代の承認欲求をくすぐりながら、自己表現を支える事業を行ってきた。 ・大学との連携では、遠藤周作生誕 100 年を記念した桜美林大学との協働事業を実施。市民研究員制度の一環としては、玉川大学の学生と一緒に「君の気持にマッチする！町田ブンガク」(冊子)を制作した。さらに完成後は、冊子を使った出張授業も実施し、学びの成果を発表する機会を積極的に創出している。
今後の予定・課題	・今後も市民の「やりたい！」という気持ちを尊重しながら、文学館との共催・協力事業に繋がるような企画や事業を実施していく。また、作品募集やフリマなど創作者や市民が主役となれる機会の創出や場づくりを続けていく。

（2）管理運営手法の見直しについて

＜ビジョンの明確化と市民参画＞
＜管理運営手法検討の視点＞
＜様々な管理運営手法の検討＞

～答申概要～

社会状況の変化に対応しながら市民に必要とされる施設であり続けるために、市として明確なビジョンを持つとともに、市民目線・専門的知見それぞれの視点から運営方針等の見直しを行うことが重要である。

管理運営手法としては、直営のほか一部業務の外部委託や指定管理者制度など様々な手法があるが、文学館の存在意義やあるべき姿を踏まえた上で、メリット・デメリットについて詳細な検討が必要である。とくに学芸員の専門的知識や市長の寄贈者、市民との信頼関係など、文学館が蓄積してきたものを維持・継続していくことが大きな課題であり、これらを踏まえた慎重な検討が必要である。

現在の状況	・運営協議会を中心に、文学館のミッション、ビジョン、バリューについて繰り返し検討を続けてきた。 ★文学館の現在のミッション 「”ことばの扉”として、子どもからお年寄りまで、あらゆる世代の人たちに、ことばや文字、文学の魅力に触れる機会、学びのきっかけとなる機会を提供します。また、世代を超えて多様な考え方や価値観に触れ、コミュニケーションを図ることで、創造性を高め、豊かな心を育む場所となります。」 ・管理運営手法については、①一部業務委託、②単独施設での指定管理制度の導入、③複数施設での指定管理制度の導入の 3 つの選択肢で検討した結果、③が最も有効であるという結論に達したが、その後も「文化施設の経営的視点で、いま、何が求められているか」をテーマに議論を続け、収益性の検討や補助金、助成金、ふるさと納税を利用した財源の確保、民間提案制度へのエントリーなど、収益手段の増加や外部資金の獲得等による財政基盤の多角化と民間企業、文化団体、文学に興味を持つ個人との関係性の構築による安定した管理運営の実現を目指している。
今後の予定・課題	・文学館のミッションは、運営協議会を中心に約 10 年を掛けて議論を積み上げ、現在に至っている。現在の文学館の活動はこのミッションを柱に実施されている。一方、ミッションを実現するためのビジョンや成果を判断するためのバリューについては、来館者の年代やニーズの変化などによって絶えず変化をしていくため、今後も運営協議会を中心に検討をしていく。 ・管理運営手法については③が最も有効であるという結論に変わりはないが、現実的にはともに指定管理となる文化施設は想定できず、当面は直営での運営が妥当と考える。